オーストリア「皇太子」の日本訪問（2）

フランツ・フェルディナントの訪日日記
《1893（明治26）年8月2日～24日》（その2）

渡辺　肇

倉敷芸術科学大学大学院人間文化研究科

（2004年9月24日　受理）

8月4日、長崎—熊本（承前）

湾外に出ると高く荒れ狂う海が直ちに八重山を振り廻し、両側に32度まで横揺れさせた。日本国内で自力建造されたこの巡洋艦は非常に船体が長いのであるが、それにしては横幅が狭いので強い横揺れが生ずるのである。波が高くて難儀な海はこの様な流儀で建造された船に対して非常に不快なものと成りうるのだ。強い横揺れの結果、日本側随員は宮内官達と同様に徐々に船酔いに襲われて退出してしまい、第8甲板上では机、椅子、ソファーが踊るが如く運動する状況と成ってしまい、最後には転倒してあちこちと滑りまくる有様であった。

睡眠の欲求に襲われて、自分の船室に赴いたところ、その船室の前に日本国天皇から私に差遣された正装の近衛騎兵[13]が立哨しており、一方の手で剣の柄を握っており、その剣は直ちに必殺の一撃を与えるために抜剣さるかの如くであったので、私には少なからぬ驚きであって、愉快な気分になった。この近衛騎兵は次第に非常に素晴らしい若者であると判明するのである。我々は互いに一語も話す事は出来なかったが、旅の間に彼は私から完全な好感を得た事を理解したのだ。小柄で、肉好きが良く、サーベルの様な形の脚が目立つ彼は、黄色の襟の縁取で飾られた萌黄色の軍服を着用していた。高い突撃帽が仰々しい衣装を完結する。私の近衛騎兵が仰々しく締めていた黒塗り皮の幅広ベルトは恐らく任務の象徴として考えられた弓矢を前後に派手に示していたのだが、その弓矢は、日本は自由恋愛の国だと一般に思われていたので、我々にとっては恋愛神の特性の印象の方が大きかった。

我々の航海は南方に向かい、肥前半島の南の突端である野茂崎で東方に変針して、後方を島原半島側にして、前方の天草の下島と上島との間を抜けて小さな港町である三角に向かった。静かな水路がある緑の島々の間に着くまでに、3時間に渡り荒々しく横揺れしたのだ。三角に到着する前に再び礼砲がなり響いた。我々に随伴した巡洋艦高千穂が長崎に帰り、代わりに脇の入江から砲艦鳥海が現れたからだ。

大型ボートの上で多くの人が歓迎しているのが見えた後に、我々は上陸した。その人々の中には皇族北白川家の能久親王[14]の御付武官がいた。そこには果てしない人々が、警察に厳しく規制されながら、我々の到着を待ち侘びていた。三角全体が旗を掲揚していた。一軒一軒に、

日本の、日出ずる国の目印であり、白い野原の太陽を意味する、赤い円が付いた白い旗が翻った。私には初めての経験であったが我々への栄誉に昼の花火が打ち上げられた。臼砲[15]から上方に発射され、上空で音高く破裂し、様々の色の風船、三角旗、落下傘やテープを散布する打上花火であった。これらの総ての品々は、一部は我々の黒黄色[16]を、一部は日本の色を示しながらゆっくりと地面に下降したり、風に吹かれて行ったり来たりしたり、空中をひらひらしたりして、非常に魅力的な印象を齎した。

熊本までのおよそ42kmの道程は宮廷人力車で進行する事となった。車夫たちは総て例外なく同じ制服を着用させられていた。青くゆったりした半纏に、膝とふくらはぎが露出するように、白い膝上までの股引を着用して、足は足袋で守られていた。帽子は白い藁帽子であった。私の車は3人の車夫によって前に牽引された。1人は長柄の中を行き、しかし他の2人は前駆けをして細い綱を引張った。人力車夫の能力は全く素晴らしい。というのは、暑さはまさに茹だる様であり、道路は直ぐに上り坂や下り坂になっており、所々は正に新しく砂利を敷かれたばかりであったのに、我々の車夫たちは2回の短い休憩を取っただけで、熊本までの行程を駆け足で、5時間半で進んだのだ。そうとも、最近この国内を旅した事のある、同行している紳士の1人が言うには、彼は1人だけの人力車夫で1日に18時間をかけておよそ120kmを走行したとの事なのだから！

三角の直ぐ後ろには山が堂々とそそり立っていた。海岸に沿って険しい山の斜面に通じていった。小川を横切った後に景観が広がり、愛らしい魅力に恵まれた野原の中を道が伸びていった。総ての領域が非常に勤勉に耕作されていた。どんな小さな土地も荒地や未開のままではなかった。平地は良く灌漑設備されており、大部分が米作に充てられていた。しかし、丘や山の斜面にも、段々に上下に横たわり、米作文化に役立つ、独特で一連の棚田が見られた。遠く、広く、目に見えるのは、暗い杉林の濃い緑から明るい笹の薄い色合までの、様々に濃淡のある心地よき緑のみであった。

既に熊本までの走行の間に私が得た印象は日本の稠密な人口密度であった。というのは、我々は至る所で村落や村や町を通過して目に見たからだ。田舎の家々も、都市の家々も大きな違いがなかった。それらは一階建てか二階建てであり、簡単で質素ではあっても、みすぼらしいという訳ではなく、主として材木で建てられた建築物であり、その内部は非常に清潔で整理整頓が行き届いていた。屋根は独特に曲がった瓦、すなわち所謂“破風”か、材木か、かなり頻繁に藁で、しかしながら、非常に入念に葺かれていた。

我々が接近すると人々は何処でも急いで家の前に出てきて道路に殺到した。特に女の連中が好奇心では傑出していた。ついでながら、聞くところに寄れば、我々の故郷でもこの様な場合は同様である。我々に対し親しげに微笑みかけたり上機嫌で挨拶する日本女性の中には、非常に上品に整って、こよなく愛らしい顔立ちが傑出している多くの女性を観察する事が出来た。野原からも、男の子や女の子が、我々が移動する通りに駆出してきて、活発な身振りで私を指し示した。あるいは恐らくは、大きな羽飾り帽を被り民衆の忠誠を禁欲的に泰然自若として受

け止めて日本人の近衛騎兵を指し示したのであったのかもしれない。

行列の先頭には2人の警察高官が先導した。その2人に私は人力車で続いた。人力車の一方はその近衛騎兵、他方は、普段は入室警備の役割の制服を着用している一人の宮内官が、両側面を護りながら進行した。後者は表情に真面目な皺を寄せて、どんな瞬間にも一撃出来る様に、両手に大きな剣を持ち、自分の前に掲げていた。5時間の走行の間、私が観察した限りでは、この男は表情を崩す事はなかった。次に日本側接伴員が続いた。その後に故国からの随員の紳士たちが行列に加わり、最後に官吏、侍従、従者の一団が殿を為した。

我々の車行はそれ自身で明白な警察的特性を齎した。我々を最悪の攻撃から守る事が重要であったので、政府が見事な治安措置を取っていたからだ。通りには警察が配置されていた。総ての橋が監視されていた。人々が集っている所には常に警察官が姿を現していた。我々が通った場所で群集の中にいた探偵たちについては言う迄もない。幸運な事に、故国に於いて私は完全に自由で、個人的な警備の配備なしに移動できる事に慣れていたので、警察組織は私には変に思えたし快適であるとは全く思えなかった。しかしながら、その対象がロシア皇太子であって、特別の歴史的な運命的行為、即ち、横にいた警備員が起こした、最近発生した卑劣な暗殺未遂事件によって、ともかくも理解できるのではあったが[17]。どの部分も須らく欧州を手本として立派に組織された日本の警察だと私が自分なりの見解を抱ける様に誇示する為に、この様なとてつもない量の警察力が投入されたのだ。日本の警察は、欧州の模範と同等である為には、恐らくはもう少し目立たないように、もう少し静かに職務を果たさねばならないのだ。私が日本滞在中は囚人と同じで、絶え間なく100の眼で監視されており、何処にもお忍びではとどまる事が出来ないのだとの思いを私に警察の熱心な顔たちが齎したのだ。

かなりの時間が経ってから車夫たちは新鮮な水を貰い生気を取戻した。その水は大量に道路の端に設置された桶に準備されていた。素早く車夫たちは長い行列を作り、そして、滞在することなく更に進行した。その後で、我々は魅力的な村の絵画的な場所である小さな神社の前の素晴らしい木陰で15分間の休憩を取り、召使たちが帝の配慮で当地まで送付された飲み物やスナックなどを差出した。その間に人力車夫たちは短い休憩に没頭した。残念な事にその場所は、一種の衝突止めの網と暗い布で、民衆が我々の近くに来れない様に、隔離されていた。そして、洋服を纏った少数の地元の有力者たちだけが入場出来たのだ。明らかにこの空間の閉鎖の目的は暗殺を防ぐ事であったのであろうが、そのような事は私には少なからず滑稽であった。

直ぐに我々は人力車での走行を快い場所を通り沢山の村落を抜けて続行したのだ。それらの村落の入口では、名士たち、それから、かなりしばしば消防組員たちが挨拶した。後者は青地に白の印半纏を着用していたので、見分けが付いたのだ。野原で働いている娘たちは、ケルンテン[18]のヘルマゴーア地方での残念ながら益々廃れて来ている民族衣装を、生き生きと私に思い出させる様な衣装を着用している。勤勉に働く娘たちは膝上までしかない上着を着て、青い木綿の足袋を履いている。膝と脚は露出している。頭に巻いた白い手拭が焼き付ける様な太陽光線に対する防御である。

稲田の間に、灌漑の目的に利用されている沢山の池や沼が広がっている。しかしながら、インドの似たような貯水施設とは大きく異なり、汚染されたり荒廃したりしていることは全くなく、良好に維持されており、大抵は花が非常に美しく咲き誇る蓮科の植物によって保護されていた。既にこの地で、日本の米栽培の、即ち主要農業生産分野の、意義の結論が導かれる。この栽培の偏重は、日本農業の特徴であり、土地の非常な細分化と、その結果、至る所で零細農業と庭園規模の農耕栽培が支配的となるのだ。米の栽培の下では、牽引家畜の使用は最初から排除されているし、他のものの栽培に利用されている僅かな量の田畑の耕作は人力によってのみ可能となっているので、日本の農業経営では殆ど家畜を用いない事が納得されるのだ。事実上当地に於いては牛馬はたいてい荷物運搬動物としてか乗馬用に用いられ、それに反して鋤や馬車に繋がれる用途に用いられる事は余りなく、牝牛も搾乳牛として用いられる事は殆ど全くない。

しかしながら、更に2時間走行した後に暫時の休憩をした。金塗りの襖が備わり、蓮の花の天井の下に豪華な椅子が置いてある小屋ででであった。その椅子に席を取り、仏陀の如く座って氷レモン水を啜ったのだ。そのあいだ日本側の廷臣たちは休みなく御辞儀をして私の周りに半円形を作った。

夕方の6時頃に我々は目的地に近づいたが、若干疲れ果てた。しかしながら、横断した熊本の市街地の景観に魅了された。市街地の入口で我々は既にかなり遠方から大勢の人々と軽騎兵1個中隊[19]を認める事が出来た。その中隊は我々の熊本入城に際し日本の将官喇叭を吹奏し栄誉礼を行なった。当地で我々を守備するために投入された警察官の数は非常に増加した。私は、当地で第6師団を指揮している能久親王が居住する、目立たない小さな宮殿まで走行した。三宮の案内でその宮殿に入ると門のところで宮殿の主人が挨拶した。親王はずんぐりした体形で顔の色が黒かった。鋭く曲がった鷲鼻、真っ黒で輝いている眼、太い眉、濃密な口髭が容貌をエネルギッシュに表現した。能久はかなり上手にドイツ語とフランス語を話す。これらの言葉を彼は1870年から1877年まで過ごした欧州滞在の間に習得したのだ。1868年の天皇の世俗的権力を回復するための戦い[20]の際に能久親王は意思に反した政治的役割を演じなければならなかった。というのは、皇族の親王として、ある規範決まり事に則って江戸北部の上野東叡山寛永寺門跡の顕職を授けられていたのだが、叛乱軍[21]の暴力での強制によって、反天皇を宣言する事となった。この様な身分で、彼は実権もなく意思もなくして、叛徒たちに身を任せたのだ。それから、叛乱の鎮定後に特赦され、ヨーロッパに送られたのだ。

両国の随員紹介の後にレモン水が振舞われ、更なる挨拶の応酬がなされた。その後に、親王と一緒に背の高い軽四輪馬車に乗車した。我々の宿泊所まで能久自身がその馬車を操った。その傍らを3人の男が走って馬を導いた。中隊の半分が我々の馬車を速歩で先導した。その後を、人力車の全車列が続いた。中隊の残りの半分が行列の最後に位置した。道路に沿って、熊本の全衛戍部隊が整列した。歩兵第13聯隊、歩兵第23聯隊と並んで、歓迎列の側面には非番の将校たちが配置された。日本陸軍はフランスの手本に非常に忠実に沿った軍服を着用している。閲

兵に参加している歩兵は緋色の詰襟と緋色の肩章が付いた紺色の衣（ウワギ）と緋色の袴（ズボン）[22]を着用している。肩章には聯隊番号がくっきりと付されている。帽子はエナメル塗りの、余り感じの良くない、円筒型皮帽子を被っている。部隊は日本製の11mm口径の村田式後装銃で武装している。この銃は、しかしながら、間もなく口径8mmの連発銃に交換される筈だ。銃剣と、我々の旧形式のものを思い出させる背嚢によって装備は完結される。特に夏季の練兵訓練に着用される通常軍装には、白麻の上着にプロイセン型の鍔なし帽が使用される。将校たちは軍刀を上から下に下して側面に保つ敬礼をし、兵卒たちは捧げ銃を行なう。捧げ銃の光景は我々の陸軍に於いては不可解な理由でもはや見られない。騎兵[23]は、その風采と馬匹は私には気に入らないのであって、余りにも色鮮やかで、けばけばしい軍服を装着している。というのは、山吹色の飾紐が付いた濃紺の肋骨服と、幅広の萌黄色側線を付した酉（アカネ）色の袴を着用しているからだ。装備は村田式騎兵銃と軍刀である。砲兵[24]は、紺色と黄色が目立つ軍服を着用し、日本で鋳造された青銅製の7センチ半口径の後装砲を操っている。砲車は、私が見る事が出来た限りでは、非常に具合が良いし釣合が取れており、大抵は雄馬に牽かれている。輜重兵大隊[25]も乗馬して整列に参加していた。兵卒の衣（ウワギ）の藍色の詰襟は、我々に導入されている萌黄色の馬覆いとはっきりと対照的な縁取を思い起させた。工兵大隊[26]は背嚢に装着されている野戦装備一式で明らかであったが、海老茶色の詰襟を付けて、整列の締め括りをした。全兵科の部隊が、大きく完璧に、私に非常に良い印象を与えた。

能久親王は我々の宿舎に、もう一度、私を短時間訪問して、夜の8時に熊本倶楽部の大広間で催される晩餐会に私を招いた。

日本政府は我々の滞在に対し一軒の素晴らしい茶屋をあつらえた。そこに足を踏み入れる際には、靴を脱ぐという、この国で行なわれる風習に順応しなければならなかった。時には非常に面倒になる慣習ではあるが、日本の家屋内を支配する清潔さと総ての部屋の床を覆う優雅な畳を、顧慮すれば当然の事である。この住居は全く日本独自の様式で建設され、装備されている。我々が既に長崎に於いて路上からと茶屋で行なった研究を、当地で、最も近くから繰返し深化する事が出来たのである。我々の風習への栄誉の為に、そして、特別の豪奢の象徴として、可動式の襖で囲まれた部屋にヨーロッパ的性格の様々な家具が、寝台までもが、収納されていたが、我々は、当地では普通のやり方で畳の上で休憩する様に決めたのだ。居間の気温を快適にする冷房の為に、日本政府は北部地方から氷の塊を持って来させた。それらの氷は部屋の角に飾られた綺麗な青銅製の壷と桶に置かれた。ヴェランダが建物全体に廻らされていて、木々が生い茂っている小さな庭園とその先の御城の堀への眺望を齎す。日本人は、ささやかな住居にヴェランダと、時には文字通りの迷路と化する開けっ広げの廊下を付して、非常に独特で、我々には未知の魅力を提供するのを、とても見事に理解している。そのようにして、我々に供された建物は実に田園的な印象を与えるのだが、夜になると近代文化の設備、即ち電気照明によって非常に損ねられる。電気照明はそのような環境とヴェランダに配置された無数の古き日

本の提灯に少しも調和しないからだ。

目前に迫っている祝宴で我々が試食すべき料理のしろものが我々には余り気に入らないのではないかと言う心配があったので、私は用心のため一応は夕食を食したのであったが、氷水で生気を与える水浴をして生気を取戻した後、提灯で明るく照明された通りを熊本倶楽部に走行した。そこでは、将官の筆頭で、部隊の総指揮官である、能久親王が私を迎え、無数の提灯の眩しいほどの光で妖精の様に優美に輝いている庭に、案内した。日本人は真に照明設備の名人であり、非常に素朴な方法で素晴らしい効果を獲得するのを知っている。ここでは小さな赤い提灯だけが用いられているのだが、木々や、潅木や、岩の部分の、輪郭が続くのだ。照明設備の人工的な配列によって形成されているのだが、見かけの上では本当に自然に続く、曲線の煌めく様な線が形成されている。これらは小さな池や小川に100倍にも反射する。それらの小さな池や小川は、あちこちに真っ赤な幕が張られた暗い庭に並はずれた賑わいを齎すのだ。

祝宴は、倶楽部ハウスの2階に位置して窓が開かれ白い畳が敷かれた大広間で催された。入口に面した壁に素晴らしい掛け物、すなわち、ぶら提げた絵が示されている。それらの絵の下に親王と私に定められた上座があり、他の客の席は両側に長い列に配置されている。クッションなしに、かかとの上にしゃがみ込む様にして我々は席に着いた。早速その席に式部官と親王の御付武官が親王と私にひれ伏して額を床に触れる様にして、食事を始めても良いかどうかを尋ねた。召使に通告するこの様なやり方は私には初めてであって、無意識に微笑んだ。というのは、奇妙な儀式が、式部官の肥満と、明らかにそれに起因した動作に結びつく強烈に目立つ滑稽な努力に欠く事がなかったからだ。高官たちが立上り、式部官が手を打った。直ぐに扉が開いて、2人1組の可愛い娘たちが現れた。彼女たちは高価な着物と豪華に刺繍された帯を身に着けて、火皿[27]、つまり、着火された炭火の入れ物と、灰吹[28]、つまり、竹製の灰皿がついた煙草盆を体の前に持って来た。広間の真ん中までちょこちょこと歩いてきて、しゃがみ込んで額を床に触れて、ひざまずいたままで個々の客の所に擦り寄ってきた。我々の給仕たちは熊本一の金持ちで声望のある家族の娘たちであって、我々に特別の栄誉を示す為に本日の役割を引受けたのである。残念ながら私は良く気が利いて甲斐甲斐しい娘たちと話す事が出来なかった。それで、娘たちとの対話は専ら身振り手振りに限られた。いずれにせよ、私は若い淑女たちの明るい快活さによって舞上がったのである。というのは、猛威を振るう重苦しい蒸暑さと、我々に出された強く味付けされた無数の魚料理、の後で冷たく冷えたシャンパンのグラスを次々と所望し飲み干しながら、頻繁に話し掛けることを強いられたからだ。ここに於いて、私は親切な主人に、彼がヨーロッパ的な渇望を前もって考えて我々の元気を回復させるのに十分な飲物を配慮してくれた事を、非常に感謝すべきだと知ったのだ。

煙草盆の後に、以前と同じ儀式を行なって、蓋をされた木製の小箱が、我々に手渡された。その箱の中には、人工的に砂糖と寒天で作られた花で囲まれ、オーストリアと日本の色で描かれた両国旗を示した、板状のゼラチン[29]があった。これは、日本では宴席が終了した後に、主人が客たちに大抵は土産として持ち帰らせ宴席の場では食しない良くある料理であった。

今初めて、本来の正餐が始まった。それは一杯の御茶で開始された。勤勉な娘たちは私たちの前に漆塗りの膳を置いた。その膳には無数の料理、主として海産生物、つまり、魚、海老、蟹、更に、野菜、米、茸、果物等々が、様々のやり方で調理され、漆塗りや陶器の小皿に、美味しそうに盛り分けられていた。勿論の事ながら、どの膳にも象牙の箸と色取り取りの紙ナプキンが欠けている事はなかった。日本料理は支那料理と多くの共通点を示すのではあるが、当地熊本でも、既に以前に長崎で感じた様に、日本料理の方が美味しいと思った。何れにしろ、日本料理は個々の食べ物の素性と成分を識別する事が出来る様に調理されているのに、支那の料理人たちはこの点を不明瞭にしているからである。娘たちの一部が膳の運搬に従事している間に、他の愛らしい給仕女たちは客に陶器の小さな瓶から盃に酒を注いだ。この酒は、少量嗜んだのであるが、とても良く我々の口にあったのである。

晩餐の主采は魚、焼肉、果実と野菜であったが、それらは非常に見事な、想像量豊かなやり方で、三つの膳に配膳されていた。それらの膳は、それぞれ2人の娘たちによって、親王の前と私の前に置かれた。そこに芋と小豆で作られた岩塊と洞窟があり、その間で魚たちが頭を前に伸ばしており、遠方に鶴とこうの鳥が紅白の人参と大根、及び葱で形成され、干し葡萄で出来た小舟が備えられている。これらの動物たちの下に梅で作られた龍がいる、その隣にはメロンの亀が這っている。この芸術作品に根を張っているように見える緑の葉をつけた小さな木々が、そこに付けられた果実の重さで曲がっている。華麗なる精華は菓子類の調製の際に料理人の想像力によって齎されるのである。この中に、伝説上の動物たちや、不思議な白粉花の形が現れるからである。食通の祝宴を、それ自身は戯れではあるが非常に難しくて骨の折れる仕事を示し人・物の像を造形する日本人の特徴的な喜びを、我々が興味深く十分に感心した後、何人かの娘たちが膳のところに座ったままこの素晴らしい作品を解体して小皿に盛り分けた。他の娘たちがその小皿を我々に配った。そのようにして我々一人一人が龍や、鶴や、亀などの、分け前を貰った。各客人の膳が全部の皿と鉢をもはや収容できなくなった場合は、料理は客の隣の畳の上に直接置かれた。

広東と長崎で実施した予行演習の御蔭で、我々は既にかなり箸の扱いに習熟していたが、多くの愉快で一寸した椿事が出来し、それらのことが笑いを引起し会話の材料を与えた。これらが可能になったのは、我々が宴席の主人及びその国の一部の人たちと極めて活発にドイツ語で意思を疎通させる事が出来た状況の結果であった。

宴席の終りに隣室から、子供から成長したばかりの若い娘たちの演奏で、歌と音楽が響いた。四季と花の舞が上演された。その際の彼女たちの優美な裾捌きと優雅な扇子捌きが驚くべき効果を齎した。我々はこれらの小さな芸術家たちの師匠の手腕に対し完璧なる称賛を与えたのだ。

夜遅くなってやっと、我々は我々の感じの良い住居に帰還した。我々はそこのヴェランダで日本人の様に着物を着て爽快な冷気を満喫し庭園の照明と花火を楽しんだ。その花火は大量の光と炎によって妖精の様に不思議な効果を及ぼした。花火製造術の進歩は無くなってしまっていて、過去の遺物を繰返す事が出来るのみだと信ずるべきであろうが、日本に於いて花火師が

魔法を使った様に不意に取り出して見せる思いもしない代物を目前にすれば、逆の事を確信させられる機会を持つ事になるのだ。

8月5日、熊本にて

夜明けの直後、私は一人の理髪師の手中に落ちた。この理髪師は沢山の小刀を用いたとても上品なやり方で自分の任務を果たしたが、私は我慢を強いられた。

三宮に随行され馬車で、朝の時間を無視して作用する重苦しい暑熱の下を、能久親王が私を迎える熊本城[30]に向かった。

熊本市は肥後の国と筑後の国を包含する同名の県の中心地であり、1891（明治24）年の調査によれば54,000人以上の住民を有し、河口が6km下流にある白川の河畔に所在するが、1877（明治10）年に戦火[31]によって破壊された上に、その後の地震によって非常に激しい被害を受けた。部分的には新しく建設されているので、この都市は、その基本計画によって、均整の取れた印象を与え、広くて木々が植えられ清潔に保たれた道路が傑出している。家屋は小さくて、独特の屋根を備えている。茶屋や金満家が所有する宮殿のような家を除けば、何処でも妨げられずに平穏なる家庭や家族生活や非常な量の独特な商品を詰め込んだ小売の店の中を見ることが出来る。

1592年に日本が朝鮮に侵攻した際に総大将の1人であった加藤清正が築城した熊本城は、直ぐに軍用地とされ、現在は、その広大な敷地が、一連の軍用建築物、すなわち、兵営、営舎、厩舎、倉庫、弾薬庫等々で占められている。目立つのは、尋常でなく高い、巨大な石垣で築かれた城壁と、埋立てられてはいるけれども、直ぐに分る深い堀である。その内部自身が城壁で囲まれ、城門によって中断されている要塞である。今日に於いては城壁にはもはや防衛能力が無い情勢が存在する。以前の非常に強力な場所は、周辺の城を俯瞰する丘陵に要塞か砲台かを配置できない場合は、近代的な火砲による包囲を受ければ、殆ど耐える事が出来ない。1877（明治10）年にその目的に完璧に適ったのではあるが、現代に於いてはこの城はもはや要塞としての役割を果たす事が出来ないであろう。というのは、薩摩の叛乱[31]の際には、谷将軍[32]に指揮され、部分的に小倉衛戍地から増援を受けて増強された、歩兵1個聯隊、野戦砲兵4個中隊、工兵1個中隊、そして、福岡からの2個中隊からなり、総員3,000名で構成された守備隊が52日間、およそ16,000名の兵力で城を包囲攻撃した叛徒に対し持久したのだ。その際に要塞の周辺に位置した市街地域は火砲で十分に射撃出来る様に守備隊によって焼払われた。

丘陵の最高点に位置する司令部に通ずる道路は、総て昔の建物を通って延びており、非常なる急傾斜が目立ったので、最後には馬車を牽く馬たちは完全に立ちすくんでしまった。これらの馬はもはや牽引出来なくなった。この事が結果として馬車全体を逆戻りさせたので、三宮は非常に困惑した。彼は馬たちを打って、きつい轡のところに強烈な裂傷を与え、ドイツ語と日本語の語彙を交互に使用して、汚い乱暴な言葉で怒りをぶちまけた。そのようにしても事態が良くなる訳ではない。我々がやっとまた前進出来たのは、何人かの徒歩の者たちが、窮地の救

い手としてこちらに急いでやって来て、車輪を掴んで馬車を高い方に向けて押し進めたからであった。

能久親王は私を非常に丁寧に、広くは無いが快適に設備された住居で迎えた。そして、昔の要塞を描いた絵を示した。彼は私にその絵と高い芸術的な価値を有する3個の魅力的な陶器の像を贈物として差出した。その家屋の前に位置して、廃棄された数門の火砲が見える稜堡の一つから、我々は全方向を自由に見渡せるその足元に市街地と郊外が広がっている城からの見晴しを楽しんだ。　（紙幅制限のため続きは次号に掲載。）

註

13) Leibjägerの訳。直訳すると近衛猟兵となる。猟兵は歩兵の一種であるが、日本には存在しなかった兵種であり、騎兵の定色である萌黄色の軍服を着用しているので、近衛騎兵と訳した。
14) 北白川宮能久親王（1847－1895）：フランツ・フェルディナント訪日時には陸軍中将、第6師団長；日清戦争の際に近衛師団長として台湾で戦病死。
15) 花火打上筒
16) ハプスブルク帝国の国旗の色
17) 大津事件：フランツ・フェルディナント訪日の2年前の1891（明治24）年、来日中のロシア皇太子二コライ（後の、最後のロシア皇帝二コライ2世）に対し沿道警備の巡査津田三蔵がその佩刀で切付けた暗殺未遂事件；大審院長の児島惟謙の判決で日本での司法権独立が確立した。
18) オーストリアの1州
19) 第6師団騎兵第6大隊からの1個中隊。日本陸軍の騎兵には軽騎兵しかなかった。
20) 明治維新の戦い；戊辰戦争
21) 旧佐幕派；官軍に対する賊軍
22) 当時の日本の歩兵の袴は紺色の地に歩兵の定色である緋色の側線が入ったものであり、この表現は不正確である。
23) 騎兵第6大隊、日清戦争後に騎兵第6聯隊に改組。
24) 野戦砲兵第6聯隊、1907（明治40）年に野砲兵第6聯隊と改称。
25) 輜重兵第6大隊、満州事変後に輜重兵第6聯隊に改組。
26) 工兵第6大隊、満州事変後に工兵第6聯隊に改組。
27) 原文ではHi-reiとなっている。そのままでは意味を為さないので火皿と訳したが、手稿ではどの様に書かれているのかを確認する必要がある。
28) 煙草の吸殻をたたきいれるために煙草盆に付いている筒、多くは竹製。（『広辞苑』）
29) 羊羹の事か？
30) 北白川宮能久親王が師団長を務める第6師団の司令部があった。
31) 西南戦争
32) 谷干城（1837～1911）；フランツ・フェルディナント訪日時には陸軍中将、子爵、貴族院議員；西南戦争に際しては、陸軍少将で第6師団の前身である熊本鎮台の司令官；その後に学習院長、農商務大臣等を歴任。

Erzherzog Franz Ferdinands Japan – Besuch 1893 (Teil 2)

Hajimu WATANABE
Graduate School of Science and the Humanities
Kurashiki University of Science and the Arts,
2640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received September 24, 2004)

Erzherzog Franz Ferdinand kam am 2. August 1893 mit dem SMS >> Kaiserin Elisabeth << in Nagasaki an. Obwohl er am ersten und zweiten Tag auf diesem Schiff übernachtete, landete er in Nagasaki und erlebte dort vieles.

Am 4. August fuhr er mit dem japanischen Kreuzer >> Jajejama << von Nagasaki nach Misumi und mit dem Hof-Dschinrickscha weiter nach Kumamoto. Nach der Ankunft in Kumamoto betreute ihn seine kaiserliche Hoheit Prinz Joschihisa von Kitaschirakawa, ein idealer Gastgeber, der gut deutsch sprach und Kommandant der japanischen 6. Division war, die in Kumamoto in Garnison lag.

Am 5. August fuhr er mit einem Hof-Extrazug von Kumamoto nach Modschi. In einer Barkasse durchquerte er die Schimonoseki-Straße, landete in Honschu und übernachtete in Schimonoseki.

Am 6. August fuhr er wieder auf dem >> Jajejama << von Schimonoseki nach Mija-schima. Vor der Abfahrt begrüßte ihn Graf Hirobumi Ito, der japanische Ministerpräsident, an Bord des >> Jajejama <<. In Mija-schima wurde er zum Diner mit General Mitschitsura Nodzu, dem Kommandanten der 5. Division in Hiroschima und mit Admiral Schinanodscho Aritschi, dem Kommandanten der Kriegsmarinenstation in Kure eingeladen, wo er eine anregende Konversation unterhielt.

Literaturverzeichnis (2)

28) *Führer durch die Sammlungen von der Weltreise seiner kaiserlichen Hoheit Erzherzog Franz Ferdinand 1892-93*, Wien, 1894
29) *Führer durch die Sammlungen seiner k. und k. Hoheit Erzherzog Franz Ferdinand*, Wien, 1904
30) General der Kavallerie Erzherzog Franz Ferdinand, *Bemerkungen über die größeren Manöver in Mähren 1909*, Wien, 1909
31) *Erzherzog Franz Ferdinand unser Thronfolger zum 50. Geburtstag*, Wien,1913
32) Camillo Morgan, *Erzherzog Franz Ferdinand und Erzherzog Carl Franz Josef die beiden Thronfolger Oesterreich-Ungarns als Jäger*, Berlin, 1914
33) Austriacus, *Der Thronfolger Oesterreich und der Krieg*, Zürich, 1914?
34) G. Ellero, *Il Compianto D'Italia*, ????, 1914
35) Geleitwort von Karl Hans Strobl, *Franz Ferdinands Lebensroman*, Stuttgart, 19??
36) Leopold von Chlumecky, *Erzherzog Franz Ferdinands Wirken und Wollen*, Berlin, 1929
37) Beate Hammond, *Habsburgs größte Liebesgeschichte, Franz Ferdinand und Sophie*, Wien, 2001
38) Erika Bestenreiner, *Franz Ferdinand und Sophie von Hohenberg*, Wien, 2004